

福祉の川づくり～利用者の視点に立った河川空間の整備～

国土交通省 北海道開発局 旭川開発建設部 旭川河川事務所 ○正員 佐溝 圭太郎

1. まえがき

近年、日本では少子・高齢化が進んでおり、住みやすい高齢化社会づくりが望まれている中、川づくりにおいても、高齢者や身体障害者を含めたいろいろな人たちがいつでも川に訪れ、多様な活動が出来る河川空間の整備が必要となっている。

これは、川が持っている開かれた空間や豊かな自然が地域の財産として再認識されたことと、「癒し」など川のもつ心身の健康への効果が注目されていることが背景にあると考えられる。

旭川は市内を多くの川が流れる「川のまち」であり、市民に開かれた河川空間を創り出していくことは、快適な街づくりを進める上からも重要である。このため、旭川開発建設部では、市立病院の背後地に位置する石狩川と牛朱別川の合流点付近を「福祉の川づくりモデル地区」として、整備を進めている。



図-1 モデル地区斜め写真

2. 懇談会の設立と流れ

当該モデル地区を整備するに当たり、医療関係者、福祉団体、教育関係者などの関係機関や団体の方々の意見を広く求め、福祉に配慮した河川整備に反映させることを目的として福祉の川づくり懇談会を設立した。

第1回の懇談会においては現地視察、車椅子利用体験を行い、現況を把握し、また、福祉の川づくりの先進事例を収集し、地区の問題点、整備課題等を把握した。

第2回においては、第1回を受け、モデル地区の基本理念、基本方針を設定し、整備方針、整備構想案の策定を行った。

第3回、第4回においては整備計画案を策定し、施設の詳細設計、具体的な施設の構造検討、利用・管理についての検討を行った。

第5回では整備計画を策定し、具体的な工事の説明を行った。

第6回では、整備後の現地体験会を行うとともに、各施設に対する評価および今後の運営方針を決定した。

3. 整備前の現地体験会

第1回の懇談会の中で行われた現地体験では、参加者が高齢者疑似体験器具を装着し階段を昇降したり、車椅子でスロープを上り、斜度を体験した。整備前の現地体験会の様子を図-2に示す。これらの体験を通じて整備

前の施設に対して参加者から得られた主な意見を以下に示す。

- ・ 堤外側から堤防の天端に登る取付道路は勾配が5.5%の長い坂路で、車椅子では登ることがつらく、途中に休憩するためのスペースが必要である。
- ・ 堤防から公園へ降りる階段には手すりが必要である。
- ・ 病院から堤防に上る階段はあるが車椅子の方がアクセスするためのスロープがない。
- ・ 堤防の天端道路には木や花の植栽等、散策を楽しむ工夫が必要である。
- ・ 水辺に容易に近付けるアクセス路がほしい。



図-2 整備前の現地体験会の様子

4. モデル地区の基本方針と整備構想

第1回懇談会を受け第2回懇談会で設定された当該モデル地区の整備基本方針を以下に示す。

- ・ 心身の健康増進・回復の場として
治療やリハビリなど健康回復を行うほか、高齢者・身体障害者をはじめ、すべての人のレクリエーションの場として利用する。
- ・ 人々の憩い・交流の場として
子供たちと高齢者・身体障害者や親と子供など、多くの人々の憩い・交流の場として利用する。
- ・ 都心のオアシスとして
都市にうるおいを与える水と緑の自然環境を活用し、都市景観、都市の魅力を向上させる美しい景観を形づくる。

また、整備構想案の平面図を図-3に示す。

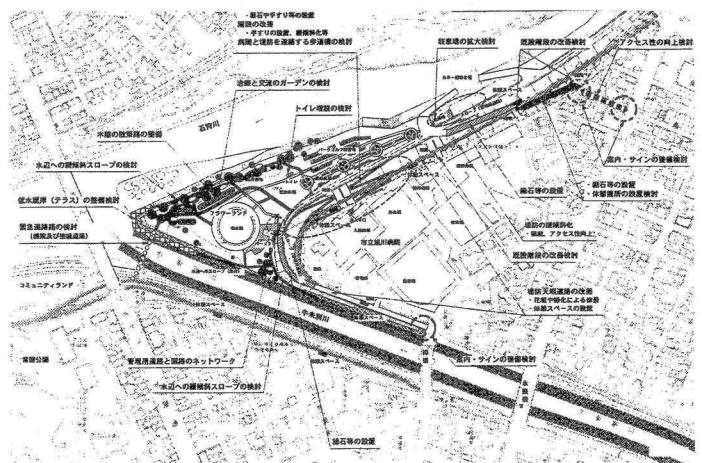


図-3 整備構想案平面図

5. 整備内容

当該モデル地区では、暫定堤防を完成化する治水事業と平行して第3回懇談会において提示された整備計画案を基に施設の詳細設計を行い、平成13年度と平成14年度に整備を行った。主な整備内容を以下示す。

- ・ 牛朱別川を渡り常磐公園へアクセスできる橋の整備
- ・ 車椅子でも利用しやすい5%勾配のスロープと途中で休憩するための平坦な踊り場の整備
- ・ 階段に手摺とスタンドベンチの設置
- ・ 堤防の天端にベンチ、プランター、花壇の設置
- ・ 施設案内板の設置

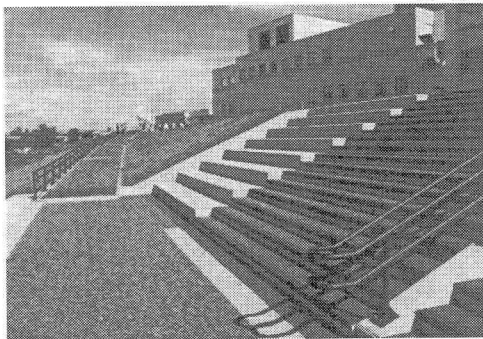


図-4 スロープと手摺付き階段の整備状況

6. 整備後の現地体験会

工事の終了後施設の一部供用を受け、車椅子利用者、高齢者および病院関係者を対象として、平成14年9月12日に福祉の川づくり整備後の現地体験会が開かれた。整備後の現地体験会の様子を図-5に示す



図-5 整備後の現地体験会の様子

また、整備後の現地体験会参加者の22名および一般の公園利用者56名を対象としてアンケートを実施した。アンケートの一部である各施設の利用しやすさに対する意見を図-6に示す。

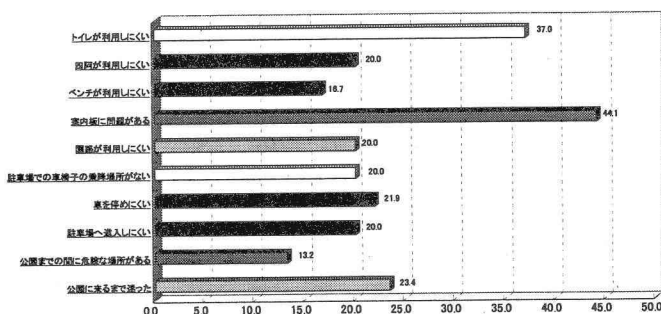


図-6 各施設の利用しやすさに対する意見

このアンケート結果より得られた主な意見を以下に示す。

- ・ 市街からのアクセス方法を表示する公園入口の案内板が分かりづらいため、公園利用者が少数である。
- ・ 案内板の文字が小さく視覚障害者にとっては見づらく、公園内の施設案内もわかりにくい。
- ・ 園路同士の交差点部に車椅子の支障となる段差がある。
- ・ 車椅子転落防止用縁石の設置が必要な箇所がある。
- ・ 視覚障害者にとって階段の踏み面と蹴揚の色が区別しにくい。

7. 今後の課題

整備後の現地体験会を通じて、現在の施設の課題として案内板の不備やPR等の不足のため利用者が非常に少ないこと、依然車椅子の利用者にとって利用しづらい箇所が施設内に存在することが明らかになった。今後、施設の改善点については利用者調査や動線調査を行い、現状の問題点を把握するとともに、多くの方に意見を求め、改善方法を検討し、継続して更に利用しやすい環境に整備していく必要がある。また、旭川市の常磐公園からのアクセスがしやすいにもかかわらず、利用者が少ないのは認知度が低いためと思われることから、今後は案内板とともに施設の広報も積極的に行っていく必要がある。

8. あとがき

今回の福祉の川づくりでは高齢者や身体障害者等の利用を強く意識して整備を行っているためにバリアフリーの面が強く、ユニバーサルデザインとしてはまだ発展途上にある。

しかし、これまでの治水事業を顧みると利用者の意見を事前に聞き、それを設計段階から取り入れ整備を行った本事業の取り組みは十分評価できる。

また、石狩川と牛朱別川の河川敷にある公園や豊かな自然のすぐそばに立地する旭川市立病院においてこの様な整備を行ったことは、病院での入院患者にとって大きな意味を持つと考える。それは、病院で非人間的な生活を送っている入院患者に人間らしさを取り戻させることである。通常の病院であれば、リハビリを行う際に病院内のリハビリ室の同じところを何度も回るか、外へ出たとしても病院の敷地内までである。しかし、ここでは病院から外へ飛び出し堤防天端へ上ったり、さらにスロープを使って河川敷へ降りたり、河川敷の公園を利用したり、常磐公園まで足を伸ばしたりと自分で目標を持ちステップを踏んだりリハビリを行うことが出来る。また、入院患者の家族や友人が訪れた際に、病室で話をするのではなく、太陽の光を浴び、雄大な石狩川の流れをベンチに座って見たり、豊かな自然を有する公園を散歩しながら会話をすることができる。これらは病院患者の精神のケアに非常に役立ち、ひいては病気の早期回復にも結びつくと言える。そういった意味でも当モデル地区が今後高齢化社会と高度医療の時代で果たすべき役割は大きく、今後も継続的に利用者にとって良いものとしていく必要がある。

これまで行ってきた事業による施設整備は、整備することが目的で整備後の見直し、利用方法の再検討、供用後の情報発信等が十分に行われてこなかったものも少なくない。今後は維持管理も含め施設を更に良いものにしていくために、利用者、地域の方々および学識経験者の意見を幅広く取り入れ施設の改善を継続的に行っていくことが大切であると考えられる。作ることが目的ではなく利用してもらうことが目的なのである。